木村陽二郎*：早田文蔵先生訪問記**

Yojiro KIMURA*: Visit to Dr. Bunzo HAYATA

よく晴れた暑い日だつた。小石川植物園裏の道には，とりもちのついた長い竿を手にしてセミをとる子が走りまわつていた。その道を早田教授の家を見出そうと門標に注意しながら尊敬している先生の宅はどんなだろうと大きな家のあるごとに歩みを早めたが結局，見出すことができず，植物園の裏門までいつて門衛に尋ねた。先生の宅は見出されたが門標にはつきり先生の名を見なかつたら行きすぎてしまうようないかにも小さな家であつた***。玄関の間をへだててすぐ台所がみえ，私は家を間違えたかと思つたほどだ。しかし玄関の間についている階段から先生のいつもの白足袋がみえやがて先生の御顔があらわれた。先生は今まで午睡をとられていたようだつた。御気の毒に思つたが御邪魔することにし，階段を登つて先生の居間に行つた。

ここには先生のいつも敷いてあると思われる御床があり，机，粗末な本箱，その他のものが雑然と，しかし常に床につかれている先生には都合よい場所におかれていた。このようなせまい粗末な部屋に病苦と闘いながら自己の信念を雄々しく世に述べつたえ，気が狂つているといわれようとも自信をまげず，真理に向つて邁進される先生に私は一層の尊敬をいだいた。先生は心臓病で3,4年前から床につかれていたのである。先生の一心が先生の体を生かしていると思われた。

先生は袴をつけて坐つておられた，私は今度，先生の御出版になつた植物分類学第一巻裸子植物をとり出して扉に何か記して下さるようにお願いしたところ，しばらく考えて句をつぶやいておられたが，やがて

分類学の基礎たる因子分配説

昭和8年7月13日　早田文蔵

と書いて下さつた。こんなつまらない本を買つて下さつてと先生は言われた。日光や長崎やツンベルグ，エングラー先生のことなどすこしづつお話をうかがつた。先生は御元気があまりよくなかつたが，それでも夏の方が冬より体によいとのことであつた。

---

* 東京大学教養学部生物学教室. Institute of Biology, Faculty of General Education, University of Tokyo.

** 昭和8年(1933)7月13日筆者ははじめて早田先生宅を訪れた。その日帰つて本文をつづつた。半年ほどたつて翌年1月13日先生を再びたずねようとしたが天気がよいので牧野先生宅を訪れるとその日の午後2時早田先生がなくなられ牧野先生はお通夜にいかれたとお嬢さんからきいて驚いた。筆者は早田先生の最後の講義をきいた学生の一人である。ここに先生を記念してつたない古い文を仮名使いの訂正のみにとどめてそのまま発表させていただく。

*** 先生が病気のため大学の講義室に最も近いこの家に引越されていたことは後で知つた。

私が動的分類についての疑問をお尋ねすると先生はドイツ植物学会発表の抜刷，「植物の動的分類体系について」を取出され興奮の色を顔にうかべて熱心に説明された。「AとBの二種があるとAの中にはBの性質もある。しかし概してAの性質が多いのである。一見して黄と赤というも両者ともに黄と赤の部分がありその量の相違にすぎない。早田と木村というも早田の中には木村の性質もあり木村の中には早田の性質もある」と。

また「我々はその生存する土地を利用するのである。私が日本に生れてこなかつたら，また台湾が日本のものとならなかつたら私が *Taiwania* を発見することもなかつたし，また *Protomarattia* を発見することもなかつた。牧野さんとて日本に生れたからこそ多くの植物の新発見もできたのだ。ダーウインは英国に生れたから系統学をのべ，私はそれと全く相対した東の端，日本に生れたから因子分配説を述べ得るのだ。西洋の真似だけでは何もならない。我々は我々の地を利用すべきだ」と。

「私は述べるにはまだ早いが，あることに気がついた。誰もがみていながら気がつかないということがある。海藻の *Laminaria* の遊走子を海にまくとコンブがスルスルとできると人がみんな思いこれをみてきたが，仏人のソーヴァジョーがその間に Oogoinum と Spematozoid ができそれから Zygote ができる一つの段階を発見するまで人は知らなかつた。そのようなことに私は気がついた。」と。

先生も御疲れのようだしまたこれから仕事をつづけられるようすなのでおいとまする。私の辞退にかかわらず病身を玄関まで見送つて下さつた。「暑い中をわざわざ尋ねて下さつて」といわれた。私はそれから植物園を散歩しつつ，大学の教授，早田先生とつぶやきながら何か悲壮な感じがした。数室ではこの暑いのに教授や研究者は皆せつせと仕事をしていた。早田教授も床の中で筆を走らせておられるのだろうと想像した。

（昭和8年7月13日記）

□中井先生から聞いた早田先生の思い出

昭和8年5月4日中井猛之進先生をおたずねしたとき早田文蔵先生についての御話に「自分が学生の頃大学でがんばって勉強していたのは早田さん，柴田（桂太）さんと自分であった。早田さんは徹底的に努力の人で，あらかじめ一年間の仕事の計画をたて，また毎日する仕事をあらかじめきめて無理をしても仕事を終えられた」「自分は昔，蘚類を押入れ一ぱいに標本を集めたが松村先生にそれではめしが食えぬと叱られてやめた。早田さんは苔類を研究されたが松村先生にやめさせられた。それで自分は朝鮮植物，早田さんは台湾植物でめしを食いつつ勉強できた。」「早田さんは篤信家で立派な人であったが脚気にかかって死ぬばかりであった。それで魔がさしたのか一時，自分につらくあたられたが，今度の病気以来また立派な心にたちかえられ，遂に亡くなられた。早田さんを知るのは自分が一番であり，早田さんの死が惜しまれてならない」。（木村陽二郎）